

第IV章 考 察

1 把手付壺形土器

F-8区包含層下層で出土した異形の壺形土器。高さ9.4cm、最大幅14.4cmをはかる。口縁の一部を欠くが、全形を復元できる。黄褐色で精良な胎土に雲母の微粒を含む。焼成は堅緻である。

正面から見ると逆台形の胴部に直口縁の小壺が載っており、さらに逆台形の頂部から派生する把手によって両者はつながっている。逆台形の胴部正面に円形に剥離した箇所がみられる。

把手は、一見シンメトリックに見えるが、左右を比べると本来、左側の把手には棘状に派生した突起が3箇所以上あったことがわかる。これにたいして右の把手は、意識的に丸味をもって表現されている。

さて類例として、逆台形および皮袋形の胴部をもつ土器は、福岡市と周辺では唐原、雀居、井尻B、赤井手の4遺跡で出土しており、いずれも皮袋形土器と報告されている(註1)。時期は唐原例が、包含層出土のため時期幅を見込む必要があるが、それ以外は古墳時代前期に比定される。

比恵の例は、胴部が逆台形で底部が平坦である点は唐原例と共通するものである。呼称については、把手の突起が嘴と鶏冠を象徴したと解釈すると鳥形土器という表現がふさわしい。ともかく皮袋形土器とは区別すべきであろう。共伴遺物から、当該資料の時期は弥生時代終末から古墳時代初頭に比定される。

逆台形の胴部をもつ土器は、韓国においても出土している。寺井誠氏によれば、韓半島南西部の忠清南道、全羅道、京畿道、江原道で確認されており、鳥形土器と記されている。今回報告する土器の韓半島出土資料との関連性については、類例の増加によって系譜が明らかになることを期待したい。

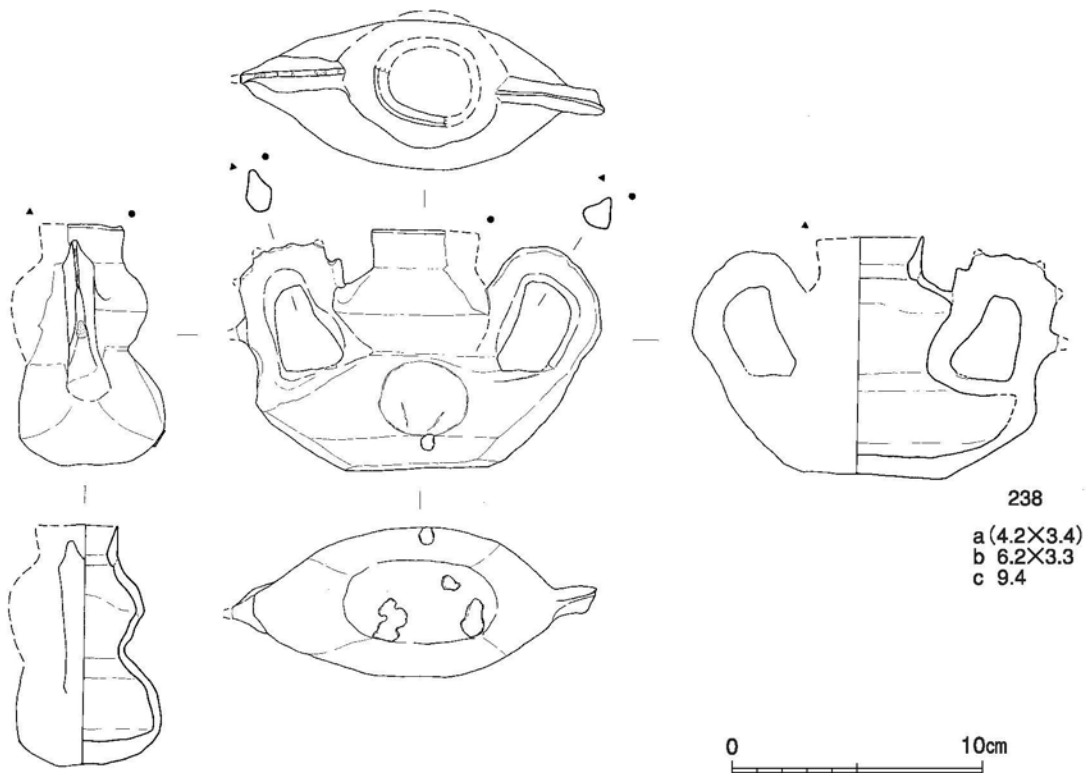


Fig. 30 包含層出土把手付壺形土器 (1/3)

遺 跡 名	遺 構	型 式	時 期	文 献
唐原遺跡	包含層	逆台形	弥生後期～古墳	小林(編)1989
雀居遺跡群	1号溝	皮袋形	古墳前期	松村2000
井尻B遺跡14次	19号井戸	皮袋形	古墳前期	屋山2003
赤井出遺跡	18号住居跡	皮袋形	古墳前期	丸山(編)1980

福岡市と周辺出土の台形の胴部をもつ土器

註1 皮袋形須恵器は除外する。

【文 献】

小林義彦(編) 1989 「唐原遺跡 II」 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第207集』 福岡市教育委員会
丸山康晴(編) 1980 「赤井手遺跡」 『春日市文化財調査報告書 第6集』 春日市教育委員会
松村道博 2000 「雀居遺跡 5」 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第635集』 福岡市教育委員会
屋山 洋 2003 「井尻B遺跡 11」 『福岡市埋蔵文化財調査報告書 第736集』 福岡市教育委員会

2 小形仿製鏡

内行花文帯を主文様とする小形仿製鏡。Ⅱ区の現代基礎の攪乱から出土した。面形は、6.85～6.92 cmで、重量73.94 gをはかる。鋳上がりは良好で、調査時の欠損部分からは赤銅色の地肌がのぞく。

鏡縁から鈕に向かって三つの円圏をもつ。鏡縁と外側の円圏との間を等間隔の櫛歯文で充たし、中間の円圏から7条の弧線によって表わされた花文帯が派生する。鈕をめぐる内側の円圏は、型持ちのためか鈕孔の延長部で途絶えている。

湯口は、鏡縁端部の外側にせり出す感触に、櫛歯文と弧文の鋳崩れが対応することから挿図の三時の位置と推定される。

鏡面はゆるい凸面を呈し、研磨は丁寧ではない。一時の位置から中心にむかうわずかな隆起は、鋳型のひびに起因するものであろう。鏡面は挿図の九時から十二時の位置に鬆が集中して認められる。

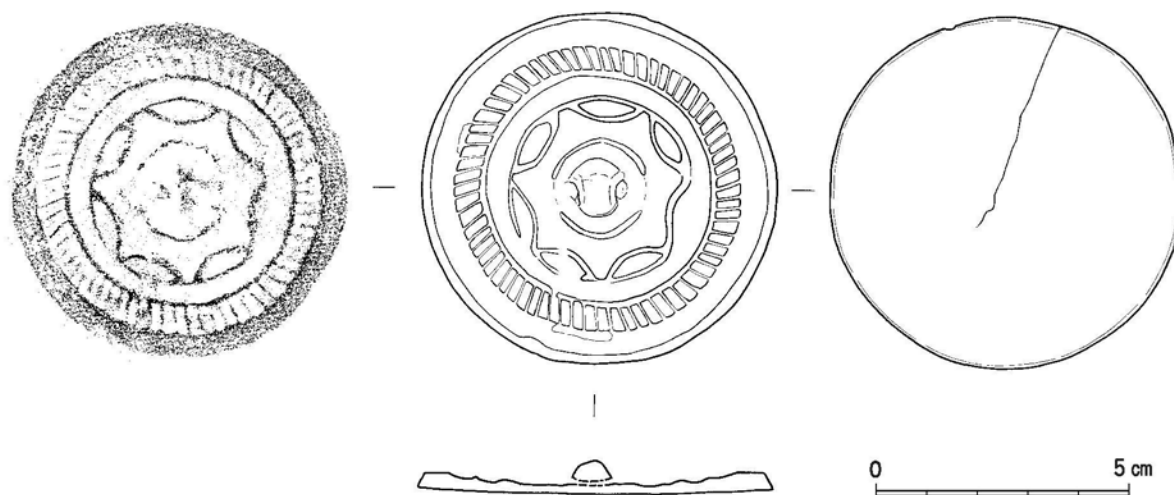


Fig. 31 小形仿製鏡実測図 (2/3)